

琉球大学学術リポジトリ

沖縄本島北部におけるスッポン外来個体群の密度と微環境利用

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学21世紀プログラム 公開日: 2007-07-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐藤, 寛之, 太田, 英利, Ota, Hidetoshi メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/807

PS-13 沖縄本島北部におけるスッポン外来個体群の密度と微環境利用

佐藤 寛之¹⁾・太田 英利²⁾

¹⁾琉球大学 COE 研究員

²⁾琉球大学熱帯生物圏研究センター

スッポン(*Pelodiscus sinensis*)はスッポン科の単模式属に属する淡水生のカメで、東アジア亜熱帯-温帯域を中心にベトナムから中国大陸南東部と中部、台湾、韓国、日本、ロシア沿海州にかけて広く分布している。本種は東アジア産淡水生カメ類の中でもっとも広い分布域を有しており、その分布域の中には熱帯から寒帯、大陸から小島嶼といった様々な環境が含まれている。本種のような単一系統の広域分布種は、生態的形質における多様性が環境的諸要素の影響下での直接的な淘汰の結果と解釈しやすく、環境の多様性と生態的諸形質の多様化の関係を検討する上で格好のモデル生物になりうる。しかし実際にはスッポンについてこのような利点を生かした方向への研究は申請者らが先に行なった若干のもの以外には見当たらず、その基盤となる生態に関する基礎的データの集積が強く求められている。そこでこの機会に、沖縄島のスッポン個体群を対象に繁殖特性、行動圏、移動パターンについて標識再捕獲法を用いた野外調査を行ない、雌雄それぞれの微環境利用や個体群密度を調べた。調査地は集落に隣接する約300m×300mの水田地帯で、調査は月に2回行なった。1回の調査では連続する3ないし4夜のそれぞれに1回づつルートセンサスを実施した。その間に発見した個体は捕獲して採集地点を記録し、体重、腹甲長、尾長を計測した。さらにはじめて捕獲されたものについては家畜用プラスチックタグとインプラント式マイクロチップタグで標識し、捕獲地点に放逐した。

調査を行なった2005年3月から7月までの間に計161個体(オス78個体、メス83個体)を標識し、のべ213の個体データを得た。再捕獲された個体は48個体(オス21個体、メス27個体)であった。月別採集個体数、全採集個体の性比、体サイズ(腹甲長)、再捕獲率に雌雄間で有意な差は認められなかった。また、個体の採集地点も雌雄で大幅に重複していた。これらのことは雌雄間で活動場所の使い分けは生じていないことを示唆している。一方、各個体の捕獲-再捕獲地点間距離の最大値をその個体の最大移動距離とみなし、雌雄間で比較したところ、この値はメスの方がオスよりも有意に大きく、雌雄間で個体の移動パターンに差異があることが示唆された。得られた再捕獲データをもとにジョリーセーバー法により算出した調査地内の総個体数は668であり、したがって調査地内での生息密度は74個体/100m²と非常に高い値となった。調査地内には水田以外にスッポンの生息に不向きな道路や畑も存在することから使用されているハビタットを水田に限ると、実際の密度はさらに高くなる。いずれにせよ本調査地内ではスッポンはかなりの高密度で生息していると考えられる。